

戦間期ポーランドのマイノリティと居住地

——アポリナリイ・ハルトグラスの残留型シオニズム

宮崎 悠

はじめに

一八世紀末のポーランド分割以来、ロシア、オーストリア、プロイセンによる支配は一世紀以上続いたが、第一次世界大戦によって三支配帝国をめぐる国際・内政状況が変化し、ポーランドの独立回復は具体的な国境線の画定を伴う議論に進んだ。パリ講和会議においてドモフスキ (Roman Dmowski, 1864-1939) からポーランド代表団は、産業地域を含む西部国境地帯を獲得した。東部国境については国際会議における交渉と切り離されたまま拡張が進み、

旧ポーランド＝リトアニア共和国のような諸民族の連邦を理想とするピウスツキ (Józef Piłsudski, 1867-1935) は東方への領土拡大を志向した。東方領域にはウクライナ人 (ルテニア人) やユダヤ人といった多くのマイノリティが居住するが、ピウスツキらの連邦案は諸マイノリティ集団から理解されていなかった。また、ドモフスキらが目指した国民国家案は国内の現状と一致しておらず、ポーランド第二共和国がいずれの案をとるにしても現実と矛盾する状況が生じていた。

複雑さにおいて最も際立っていた。「ユダヤ人」と呼ばれる人々は、ポーランド人と同様に三分割領のいずれにも居住し、それぞれの支配帝国の政治的・社会的文化を持っていた。そうした差異にもかかわらず「ユダヤ人」と総称され、また、ポーランド・ナシヨナリズムが自らの居住地を排他的に求めたとき、「ユダヤ人」の居住地はほぼ同じ場所にあった (Bartal 2005)。

本稿では、戦間期ポーランドを形作る国家構想が、第一次世界大戦以降どのように提示され競合したのかを、独立運動が残留型シオニズムに与えた影響とその結果から検討する。戦間期のポーランドにはピウスツキを中心とするゆるやかな権威主義体制が成立し、政権自体に反ユダヤ的な

領内のマイノリティのうち最多数は、主に東部地域に居住するウクライナ人であった。これに対し、単純に数の上ではウクライナ人よりも少ないものの、ユダヤ人の問題は

傾向はなかったものの、国家構想 (多民族の連邦を目指すのか、一民族の国民国家か) は流動的であった。一九三〇年代にはドモフスキらの独立運動を引き継ぐナシヨナリズムが急進化し反ユダヤ主義的傾向がいつそう強まる。こうしたなか、ナシヨナリズムが「ポーランド人 (国民)」から排除しようとした「ユダヤ人」の側は、一様ではない反応を示した。ここでは、戦間期ポーランドに特徴的な立場として残留型シオニズムに着目する。

I 残留型シオニズムのポーランド観

残留型シオニズムは、ポーランド国民としての権利義務の自覚とユダヤ人意識とを折衷し、パレスチナにおける国家建設を遠い目標として一定程度移住を支援しつつ、喫緊の課題である国内のユダヤ人の権利安定と地位向上に努めた。この立場は戦間期ポーランドにおいて萌芽したものの十分な時間を与えられず、最終的には第二次世界大戦の勃発によりパレスチナへ拠点を移さねばならなかった。

アポリナリイ・ハルトグラス (Apolinary Harglas, 1883-1953) は、残留型シオニズムの代表的な論者であった。一



写真1 アポリナリイ・ハルトグラス
(出所) Yoni Eshpar 氏提供。

九三〇年代に弁護士、政治家、ジャーナリストとして活躍した。彼はロシア分割領におけるポーランド独立運動の盛り上がりなかで一〇代を過ごしドモフスキの思想に傾倒し、独立後はポーランド国民としてユダヤ人が平等な地位を得られると信じた。将来的なパレスチナ移住・ユダヤ民族の国家建設を理想としつつ、現実にはポーランド国内でのユダヤ人国民の同権化と地位向上を図った。

ポーランド国家とユダヤ民族・ユダヤ共同体の関係をめぐるハルトグラスの「パトリオティズム」は、戦間期の終焉を告げる一九三九年九月一日にピークを迎え、一九四〇年のパレスチナ移住という断絶に至る。残留型シオニズムが遠い理想としていたパレスチナ移住が現実になったとき、明らかにされた矛盾と限界とはどのようなものであったのか。本稿では、ポーランド政治から消えていったシオニズムの一事例を検証し、残留型シオニズムの遠い目標（パレスチナへの移住とユダヤ国家の建設）が実現してしまつたことに伴う「ディアスポラの喪失」（故郷ポーランドからの引きはがし）が一人のシオニストに残したものの意味を改めて考察する。

ためナチス・ドイツ占領下のユダヤ人の生活状況を伝える資料としての価値が認められている（Engelking & Leociak 2001）。ただし、パレスチナ移住後のハルトグラスの筆致は基本的にポーランドへの望郷に従っており、ドイツ軍との関係を含め負の側面は不自然なほど僅かしか描かれていない。

定期刊行物を対象とする研究には彼の名は頻繁に現れる。一九〇六年以降、ハルトグラスはワルシャワやウツジ、クラクフなどで発行されたポーランド語のユダヤ系新聞・雑誌約二〇紙に寄稿、数紙の編集に携わった^{*3}。ツァワラによる一連の研究は、一八三〇年代から第二次世界大戦後まで視野に入れたポーランド語のユダヤ系定期刊行物の整理分類を行っており、ハルトグラスの交際範囲や発言の傾向を読み取ることができる。日本語の先行研究では、ポーランドを含むロシア・シオニズム研究の文脈から言及されている。鶴見太郎は自由主義系シオニストのロシア語雑誌『ラズヴェト (Razvet)』の寄稿者としてハルトグラスを取り上げ、彼がオットー・パウアーによるユダヤ人の民族自治論をどのように援用したかを紹介している（鶴見二〇一一）。また、戦間期の議会における少数民族の処遇是正に着目した、安井教浩の研究がある（安井二〇〇三）。

II 研究史

ハルトグラスの存在は、イスラエル建国後は顧みられなくなり、労働シオニズムが主流のシオニズム研究にあまり登場しない。二〇〇〇年を過ぎてから彼の思想的側面に関心が寄せられるようになり、一九二〇〜三〇年代には彼の論説は多くの読者を得ていたことが明らかになっている。ハルトグラス研究の第一人者ジンドゥルによれば、自伝的回想録『二つの世界の境界』(Hartglas 1996) が没後四十余年を経て出版されるまで、ハルトグラスを主題とする研究は殆どなされていなかった^{*1}。メンデルソンによれば、ハルトグラスは従来、ロシア領ポーランドの指導的シオニスト、グリウンバウム (Zsask Grünbaum, 1879-1970)^{*2} の親しい協力者として言及される場合が多かった (Mendelsohn 1982)。回想録が出版されると、ワルシャワやシエドルツェのユダヤ史に関する文献に、ハルトグラスの文章が体験談・証言として引用されるようになる。特にホロコースト研究の観点からするならば、彼はワルシャワに一九三九年一月まで留まり、ゲシュタポの交渉相手ともなった。その

二八三―三三三)。

ハルトグラスの主な著作には、先述の回想録 (Hartglas 1996) のほか、初期の代表作『領土と民族』(Hartglas 1906b) がある。一九二〇〜三〇年代にはポーランド語、イディッシュ語、ロシア語のシオニズム系雑誌・新聞に数多くの論説を寄稿した。一九四〇年に移住したパレスチナにおいては、ポーランド・ユダヤ人向けにシオニズム運動の経緯とパレスチナの入植状況を説明するパンフレット『この国を知れ——ポーランドの兵士へ』(Hartglas 1944) を残した。

III ハルトグラスの生涯

1 少年時代

ハルトグラスはポーランド会議王国東部に位置するビヤーワ・ポドラスカの同化ユダヤ人の家庭に生まれ、両親は普段からポーランド語を話し、ポーランド風の生活様式に囲まれて育った。ハルトグラスの生まれた町のユダヤ

人住民のうち多くの人はイディッシュ語を話し、また服装も長い外套を着、帽子を被るスタイルが大多数であった。そうしたなかでは例外的に、ハルトグラスは家庭でもポーランド語を話し、両親は「子どもに聞かれたくないときだけ」イディッシュで話すという、ほぼポーランド様式の日常生活を送っていた。少年時代のハルトグラスは「自分は国民としてはポーランド人で、ただ信仰の点で、形の上で、ユダヤ人なのだ」と、信仰とは分離したポーランド人意識を抱いていた。ドモフスキ編集のポーランド・ナシヨナリズムを標榜する雑誌『全ポーランド評論』を愛読し (Buthak 2000: 73)、街の住民の多くを占めた正統派ユダヤ人を「リトヴァーツイ (Litwacy)」と呼び、彼らに違和感を抱きながら一〇代を過ごした。違和感の理由は、ドモフスキの国民形成論においてユダヤ人が占めた位置から推測できる。ドモフスキがユダヤ人を「我々」から排除すべき「他者」とした契機の一つは、一八八〇年代以降、「リトヴァーツイ」が、ロシアから主にリトアニアを経由して会議王国 (特にワルシャワ、後にウヅジ) へ移動してきたことにあった (ハウマン 一九九九: 一六四; Haumann 2000: 132, 136)。ドモフスキは彼らをロシアから大量に流入してくる黒服の集団として敵視し (Dmowski 1893: 10) 国民形

話すとか、ローマ・カトリック信徒であるといった形式的な区別以上に、集団への献身を「ポーランド国民」の条件として重視していた。そのため、ユダヤの信仰を持ちつつポーランドの国民であることは矛盾しない、とも解釈できた。

ハルトグラスは、大学に入学した頃には「すでに私は反ユダヤ主義者ではなくなっていた」と述べているが、裏を返すなら、少年期に周囲のユダヤ人社会に対し抱いていた違和感、「彼ら」と自分が同じものと看做されることへの反感の大きさを表している。一〇代半ばでヘルツル著『ユダヤ人国家』を読むが、「ナンセンスだ——この話と私たちとの関係があるだろうか?」と訝り、「ポーランドから千キロメートルも離れたトルコ領の砂漠に国家を作る? 誰がそんなところに行くものか」とまったく受け入れる余地がない。結局「嫌だ、自分たちはポーランド人だし、ポーランド人のままでいる。私たちがユダヤ人だというのは、ただ形式的に信仰に関してのことだ」と強い拒否感を示した。少年時代のポーランド・ナシヨナリズムからシオニズム受容への変化が見られるのは、大学進学のためワル

シャワへ移ってからであった (Hartglas 1996: 45-50)。

成論が想定するユダヤ人像は、「リトヴァーツイ」に限らずユダヤ人全体を「内なる他者」と見なす方向へ展開した。

こうした会議王国の反ロシア的な文脈に由来する感情を一〇代のハルトグラスはドモフスキと共有していた。以前から会議王国のポーランド社会に同化していたユダヤ人にとって「新顔」の「リトヴァーツイ」は「ロシア本土深くからやって来た、ロシア語とロシア文化にすっかり浸かった」人々であり、近づきがたかった (Cata & Zalewska 2000: 190)。彼は自宅に間借りしていたロシア出身のユダヤ人青年たちについて「私は『中略』ポーランド人であったのに、彼らは『リトヴァーツイ』だった」とし「私たちを分かちものは、日常の言語のみならず、暮し方、教養、振る舞い方の違いであった」と回想している。

ギムナジウム時代には社会主義に傾倒する友人の影響で多くの書物を読んだ。しかし社会主義に同調はせず、それ以上に影響を受けたのは、ロシア領において禁止されていた『全ポーランド評論』で、ハルトグラスはオーストリア領のクラクフから取り寄せて定期購読していた (Hartglas 1996: 44, 48)。ドモフスキの熱心な読者として「全ポーランド主義」から受けた影響は少なくなかったと考えられる (Buthak 2000: 73)。初期のドモフスキは、ポーランド語を

2 ワルシャワ時代

ロシア帝政下のワルシャワ大学に進学したハルトグラスは法律を学び、シオニズムの影響を受けた学生サークルの集まりに参加し始める。当初はシオニズムの実現可能性に懐疑を抱くものの、少年時代の「反ユダヤ主義」を脱し、学生シオニストのサークル「カディマ」へ加わった (Hartglas 1996: 57-62)。

一九〇四年に大学を卒業すると、苦勞して弁護士職を得て地方の小都市シエドルツェへ赴く。シエドルツェは商業がさかんであり、一九世紀後半にはユダヤ系住民が全体の約七割を占めたとされ、シオニストの拠点となっていた (P. (Popowski) 2009: 110)。この間ワルシャワにおいては、一九〇六年二月、初めてのポーランド語によるシオニズム雑誌『ユダヤの声』が創刊される。最初の番号を手にしたハルトグラスは編集作業に参加することを決めワルシャワへ戻った。『ユダヤの声』は、ワルシャワの同化ユダヤ人層や、イディッシュ語とポーランド語の両方を解する青年層の読者から反響を呼んだ。しかし「ユダヤ人の民族的権利をスローガンとするシオニズム雑誌」はポーランド人読者に受け入れられず、定期購読の

とりやめが相次いだ (Hartglas 1996: 87-88)。

さらに深刻な衝撃を与えたのは、相次ぐポグロムの報せであった。^{6*}一九〇六年六月の聖体節にビヤールウイストクにおいて、また九月にはつい最近まで暮らしていたシェドルツェ^{7*}において (Hartglas 1996: 88, n.18)、多くのユダヤ人住民が殺害された。ハルトグラスはいずれも事件のさなかに現地入りし、危険を冒して書き送った報告記事を『ユダヤの声』が掲載した。ビヤールウイストクの出来事について、『ユダヤの声』の報告記事では「カトリック信徒が手はずを整えたとは思われていなかったが、この機会に便乗して『ポグロムに』参加した人はいたと見られる」(「」は引用者注)と述べ (Hartglas 1906a: 282)、計画的でなかったにせよポーランド人もユダヤ人殺害に関与したと示唆した。この記事の内容が口実となり、彼は弁護士事務所を追われ、一九〇六年一月末『ユダヤの声』は廃刊に追い込まれた。ポーランド語での意見表明の場と職場とを同時に失い、加害者にポーランド人を含むポグロムの危険を直接目にしたハルトグラスだが、引き続きポーランドに居住する方針に変化はなく、『ユダヤの声』の廃刊直後に『ユダヤの生活』を創刊する (Hartglas 1996: 87-93)。

ただし、ポグロムを機に彼の領土観は変化しており『領

土と民族』(Hartglas 1906b)ではユダヤ民族独自の領土の

必要性を明確に説いた。また、一九〇六年一月にはヘルシンキにおいて第三回ロシア・シオニスト会議に参加し、その途上で立ち寄ったペテルブルクの『ラスヴェト』編集グループに知己を得た。ヘルシンキ会議については「シオニズムの発展における転換の瞬間となった」と評している。「そのときまで、シオニズムというのは実際のところ、平穏な、ガルトの環境に深く根ざしたユダヤ人の協会であった。彼らは何らかの奇跡によって、あるいは偶然によって古い祖国を再建することに成功する瞬間を夢見ていた」。つまり、従来はシオニズム運動に携わるといつても、普段は正統派の教えを守り、あるいは同化し、または資金集めのプロバガンダのみを行って、政治は幾人かの「専門家」任せであった。それに対して、ようやくヘルシンキ会議が現実的なプロگرامの輪郭を描いたとし、シオニズム運動の具体化の契機を見たのだった (Hartglas 1996: 96)。

3 第一次世界大戦

ヘルシンキからの帰国後、まだ二〇代の彼は洗練された

ユダヤ文化のあるワルシャワへ引っ越して弁護士業を行う計画を立てるが、大戦が勃発する。一九一四年七月から家族とバルト海沿岸への旅行に出ていた彼は、ロシア領へ戻って前線に送られることを避け、いったんドイツ領に留まった。ロシア領ポーランドが独・墺軍に占領されてようやく、シェドルツェへ戻る^{8*}ことができた (Hartglas 1996: 129-130, 144-155)。

一九一六年一月五日にはポーランド国家の設立がウィルヘルム二世とフランツ・ヨーゼフ一世の名において宣言される。実はこの宣言はポーランド国家の地理的境界線についていっさい言及しておらず、信用に値しないとの見方もあった。それでも、ポーランド分割を行った三国のうち二国が、公式に立憲君主国家としてのポーランド建国を認める宣言を出した意味は大きかった。^{9*}また、一九一五〜一八年のドイツ軍によるワルシャワ占領は、多くの実質的利益をもたらした。ロシア支配下に比べ、ポーランド人の自由な活動に対する制限がずっと緩和されたためである。

ドイツ占領下には、長い間地下活動としてしか行われなかった「政治」に公に携わる機会があった。ハルトグラスもシェドルツェにおいて公職に就く機会を得た (Zyndul 2002: 45)。

一九一八年、唐突にドイツ帝国が崩壊すると、ピウスツキがマグデブルク要塞から解放されワルシャワに帰還、議会議から権力を委譲される。衝突や抵抗のないままドイツ軍がただ武装解除されるのをワルシャワ市民が目撃していたことは、二〇年後、第二次世界大戦において彼我の力関係を見誤る一因になったとノーマン・デイヴィスは指摘している (デイヴィス二〇一二: 二二五―二二八)。

4 独立ポーランド

ハルトグラスは独立ポーランドにおいて政治家・弁護士として活躍した。憲法制定議会選挙で議員に選出されてから、一九三〇年まで政治に携わった。一九二五―二七年にはユダヤ人議員サークルの代表となり、ユダヤ人の境遇改善を行うことを目下の課題とし、とりわけロシア統治時代にユダヤ人に課された不利な法的規制や差別が独立後も維持されていることに異議を唱え撤廃に取り組んだ。弁護士業においては冤罪事件や改宗がらみの訴訟を手がけて注目を集めた (Zyndul 2002: 47)。

議員時代のハルトグラスの様子を示すエピソードがある。一九一九年四月、ユダヤ教の過ぎ越しの祭り、キリス

ト教の復活祭の夜であった。ハルトグラスはこのとき復活祭の休暇をシエドルツェで過ごすこととし、妻と共に知人を訪ねていたが、ある委員会の議員達がやって来るという連絡を受け、急遽自宅へ呼び戻された。自宅には、旧知のグリウンバウム他に数人が待っていた。議員団は「ピンスクの虐殺」といわれる事件（ユダヤ人の若者三四人が、ロシアのスパイと疑われ、ポーランド人の少佐に射殺された）の現地調査へ向かう途中であった。深夜に到着した客をもてなすのに事前の準備はなく、普通のパンにかえて復活祭のケーキ（バプカ）、自家製のハム、バター、クラッカー（マツォットという発酵させないパン）、ビールとウオッカという、ありあわせの食卓を、虐殺事件の調査委員会のユダヤ人議員二人、ポーランド人議員五人と、ハルトグラスが囲んだ。雰囲気は気まずく、というのもポーランド人議員のなかには、反ユダヤ主義者で知られた農民党議員のミゼーラ（Antoni Mizera, 1886-1942）がいたためであった。ミゼーラは、当時流布していた儀礼殺人の噂そのままに「マツォットというユダヤのパンにはキリスト教徒の子供の血が材料で入っている」と信じ、生まれてこのかた手を触れたこともない、という人物であった。すでに夜中であった。疲れた議員らはマツォットにバターやハムを

ンドで生活し国家の基盤である法秩序の一端を構成しながら、シオニズムという思想との折り合いは、どのようにつけていたのであろうか。彼は、ポーランドに留まって啓蒙・教育活動を行い、より若い世代のユダヤ人にパレスチナへの移住を勧めることが重要であると説明していた。同じくポーランド出身のシオニストで後にイスラエルの初代首相となるベン・グリオン（David Ben-Gurion, 1886-1973）が、ポーランドを真の故郷とは考えず、三歳からヘブライ語に親しみ（Pearman & Ben-Gurion 1970）^{*}、一〇代のうちにパレスチナへ移住したのとは対照的であった（森二〇〇二：三〇―三二）。ハルトグラスが移住をためらった理由としては、言葉の問題に象徴されるポーランドへの愛着が挙げられる。彼にとってポーランド語が自他共に認める第一言語であり、ヘブライ語は使う機会が殆どなかった。イディッシュは堪能ではなかったと告白しているが、むしろポーランド話者としての自負心を表しているといえよう（Hartglas 1996: 203）^{*}。パヴェウ・フィヤウコフスキが指摘する様に、ハルトグラスの生涯を特徴付けたのはポーランドとユダヤ人社会への二重の愛情であった（Fijałkowski 2010: 111-112）。

一九三〇年代は彼の言論界における活動の最も盛んな時

載せるなどして、どんな規律も意に介さずに口へ運んでおり、最初は拒んでいたミゼーラも空腹とあって食べざるをえなかった。すると、とてもおいしかったらしく、彼は作り置きをすっかり空にしていたよ、とハルトグラスは回想している。この訪問を境に、ミゼーラはユダヤ人議員にも進んで話しかけてくるようになり、ハルトグラスらのユダヤ人同権化活動にも協力した。ハルトグラスはこの挿話について、「政治的な成功」が予想外に得られたのは、ユダヤ人の家でも「村のどんな方」の家ですると同じ様にバプカを焼き、ハムやバターを食べて暮していると分かったからだろう、あとマツォットがおいしかったのだろう、と述べている（Hartglas 1996: 204-206）。ユダヤ社会とポーランド社会の相互の無理解が不要な恐れと憎悪を招いている、という見方は、ハルトグラスと同時期に論壇で活躍し、ポーランドユダヤ交流史の発掘を進めていた歴史家リンゲルブルム（Emanuel Ringelblum, 1900-1944）の考えとも一致していた（Kassow 2007）。

議会政治を退いてからのハルトグラスは再び法廷弁護士として実績を重ねた。ユダヤ人の弁護士だからと顧客に避けられることはなく、彼が弁護した被告の殆どはポーランド人など非ユダヤ人であった（Zyndul 2002: 45）^{*}。ポーラ

期であった。一九三四年二月には経済紙『我々の防衛』において、ナチス商品のボイコット・キャンペーンを呼びかけている。「我々はドイツをボイコットするのではなく、ヒトラーのドイツをボイコットするのであり、ヒトラーの反ユダヤ主義が凋落するときには、ドイツをボイコットする理由はなくなるであろう」という記述には、ドイツ企業との取引により身をたてているユダヤ人や、ドイツ国内で商業を営むユダヤ人の商品もボイコットの対象となってしまうことへの配慮が窺える（Hartglas 1934: 2）^{*}。しかし時局は彼の期待に反して悪化していった。

5 一九三九年九月一日

ドイツによるポーランド侵攻が現実味を帯びると、ユダヤ共同体はポーランド国内における立場の明確化を迫られた。ハルトグラスのユダヤ人同権化活動とポーランド・パトリオティズムとの融合は、権利と義務を不可分とする国民観そのままに、第二次世界大戦の勃発に際しピークに達した。ハルトグラスは一九三九年九月一日付の『ノヴィ・ジェニク』紙に「全ユダヤ民族は——ポーランドと共に！」（Hartglas 1939: 3）と題する声明を寄稿している。

これは、一週間前の八月二四日、ポーランド・シオニスト会議において満場の拍手により受諾された、中央委員会の宣言を支持する内容であった。

宣言文は、「シオニスト組織とユダヤ民族は、ポーランドの側に立つ」とし、「自らの自由と独立をかけた戦い」へのユダヤ共同体の協力姿勢を明示した。ハルトグラスはここで、宣言が「全ユダヤ民族の名において」出されたのか、シオニスト会議にその権利があるのか疑問視する人々も存在すると指摘し、そうした批判は「何が『民族 (narod)』であるかを理解していない」から生じるもので、「民族」という概念を、文化的・宗教的あるいは歴史的な型の一致する集団の算術的な総数と同一視している」と批判する。彼によれば、「民族」とは「一定の共通する考えや共通の精神を持ち、自覚的に共通の目的へ向かう人々の有機的集合」であり、その場合にはシオニストが唯一の正統性をもつユダヤ「民族」の代表であることは明らかである、という。より正確には、シオニスト会議は「自覚的なユダヤ民族の名において」つまり「自らを建設しつつあるユダヤ国家の名において」宣言したのであり、パレスチナにおける五〇万人のユダヤ人の集合（すでに一定程度国家としての性質を持ち、萌芽的な軍を持つ）が、シオニ

ハルトグラスはこの宣言を、ユダヤ系の政党や団体、宗教共同体がこれまでにポーランドへの協力を言明してきたことを総括する、確実な保障だと述べる。「パトリオティズムの行動において、ポーランド国民でない者さえも含め、ユダヤ民族全体の意思の証明を与えた」という。というのも、ポーランドの「反ユダヤ主義者たちがうんざりするほど書いているような、世界に単一のユダヤの大国があるわけではない（それは第三帝国の、金で雇われたかあるいは名誉職のエージェントの空想である）」が、しかし、もし各国に分散する「ユダヤ民族が、最も権威ある代表の口を通じ、影響力や交友関係をポーランドの善 (добро) のために活用したい旨、了解するよう求められたら、——それは最も重要な事項であり、一蹴すべき要求ではない」からである。「ポーランドの善」のために行動することは、ドモフスキ初期の代表作「我々のパトリオティズム」において「ポーランド人」の基準とされていた点である。ハルトグラスは今一度宣言文に目を向ける。

「ユダヤ民族全体はポーランドの側に！ 血と命、財産そして道徳的支援を——ポーランドのために！ 重大な瞬間においては、皆が戦列へ、塹壕へ、政府の指揮

スト会議の口によって語っている、と説明する。背後にはさらに六百万人のユダヤ民族がおり、さまざまな国に分かれて暮らしているとはいえ、彼らはシオニズムの圧倒的な影響下において「シオニスト会議の演壇から出てくる一つの言葉を恍惚として聞き、それらの言葉を道標とも自身の進歩のための道徳的規範とも見なしている」という。従って、ユダヤ民族がポーランドの側に立つという宣言は「三五〇万人のポーランド・ユダヤ人が、法的命令だけでなく道徳的命令によって、自分の意志によって、国民としてまたユダヤ人として、ポーランドの自由裁量の下にあることを意味している」という。ここでハルトグラスは宣言文を抜粋する。

「武器を背負う能力がある者、

ポーランド・ユダヤ人はすべて、

軍に加わり、自らの血と命をポーランドのために

捧げる準備ができており、

ポーランドのユダヤ共同体全体は、

国家がユダヤ共同体に要求するあらゆる犠牲を、

被る用意ができています。」

のもとへ！ ポーランドを囲む防壁において、我々は防壁全体と緊密に結びつく礎石とならねばならない。」

さらにハルトグラスは、ここで問題となっているのは他でもなく「我々が国民であるところのポーランドの問題」であるとし、「我々、ユダヤ人は、戦争を望まない——結局のところポーランド全体が、全世界が、戦争を望まないのと同様に。しかし覚えておかねばならない、戦争が起ころうと、起こるまいと——ポーランドは、この歴史的な大混乱から、よりいっそう強健になって抜け出ねばならない！ そしてユダヤ共同体は、民族として、自身のパレスチナにおける歴史的計画に焦点を合わせつつ、——やはりいっそう強健になって抜け出るのだ」と結論付ける。これが、ドモフスキ初期にみられる「パトリオティズム」と「ポーランド人」の定義とを敷衍し、ユダヤ人であることとポーランド国民であることを両立可能と見なしたハルトグラスが、戦争の危機に直面して引き出した答えであった。

なお、ハルトグラスを含め当時のユダヤ共同体がどの程度ナチスの危険性を認識していたかは議論の余地がある。先述のように、第一次世界大戦期のドイツ軍による占領は

どちらかという「良い統治」として記憶に新しかった。そうしたドイツ認識が「ヒトラー主義は勝利しえない。あるいは血まみれの決定的な戦闘において敗北し、あるいは降伏を余儀なくされ、徐々に打破されることになるだろう」という（戦意発揚でないとするれば）樂觀につながっていた。そして「ヒトラー主義やそれと結びついた黒と赤のファシズムの全般的な撤退は、パレスチナにおける我々の立場を強めるに違いない」とし、パレスチナへの移住推進と正統化の強化にこの戦争が一役買う、という見通しさえ示している。歴史家リンゲルブルムの記録においても、対独戦がポーランド社会とユダヤ共同体の協力を強めるという肯定的な見方が紹介されていることから、開戦当初のハルトグラスの判断は極端に世論から外れていたわけではなかったと考えられる。

ハルトグラスは声明の最後に、「我々が望もうと望まないと——我々「ユダヤ」の問題は目下、ポーランドの問題と緊密に結びついている。そのため、我々の民族全体は、ポーランドにしようと、ポーランドの国境の外にしようと、ポーランドと共に歩み、ポーランドをかけて戦わねばならない」として、運命共同体としてポーランド国家とユダヤ民族とが切り離しえないことを強調している。そして

瞬間以降の自身をハルトグラスはこう表した。一九四〇年二月二日、彼は家族とともにトリエステからマルコ・ポーロ号に乗船し、パレスチナへ到着した。シオニストとしての言動とは裏腹に「そこですぐに死ぬだろうという予感」を抱いての旅であった。この時を回想する文章が執筆されたのは一九五〇年であり、結局パレスチナ到着後も十年以上生きていたことになるのだが、それは「誰一人にとって必要のない、自分にとっても必要のない人間として生きている」時間であった。もはや一廉の人物ではなく存在意味のない「第五の車輪」、それがパレスチナにおける彼の自画像であった。

到着後、ハルトグラスはカプワン (Eli ezer Kaplan, 1891-1952) から以前から交友のあった知人やユダヤ機関の幹部らに迎えられる。しかしすぐに、ワルシャワ時代に比べ、ハルトグラスと彼らの立場が逆転したことに気づかされる。晩餐に招かれたハルトグラスは「ワルシャワでは、私の事務所だけでなく、私の家に招かれるのは彼らにとって叶わぬ夢であったろう。まして、私たちを自宅へ招くなど。それが起こったのだ」と、無名であった人びとがいまや主人役となっている社会に違和感を抱く。彼はロンドンのポーランド亡命政府に期待をかけており、「ポーランド

付言して「このような重大な瞬間にさえ、：我々に対する敵意に満ちたさまざまな行為」があると指摘し、ポーランド国内における反ユダヤ主義の高まりを示唆している。しかし、そうした行為を原因とする「多くの悲しみ」については、いつか「話し合う時が来るだろう」と述べるにとどめ、いま争点化すべきではないと戒める。「今は悲しみや気晴らしの時ではない」のだから、「共に結束して」、ユダヤ人とポーランド人が「肩と肩を並べ！」「そして今より、全ユダヤ民族はポーランドと共に！」歩むことを呼びかけて声明を締め括っている。

この声明を書いたとき、ハルトグラスは、「三五〇万人のユダヤ人の血と財産」をもってポーランド国家に貢献するということが現実は何を意味するのか予見していなかった。声明からわずか三カ月余り、一九三九年十二月、ハルトグラスは家族とともにナチス占領下のワルシャワを逃れ、パレスチナへ渡った。

おわりに

「私は人間でいるのをやめた」。パレスチナに降り立った

は以前の姿で再現される。そして、まだポーランドにおいてユダヤ人大衆との関係において利用価値のある、名のあたるユダヤ人政治家たちが必要とされる」という展望を抱いた。それは「私はポーランドに戻り、そこでかつての地位を占めるであろう」という願望と同じものであった。

現実にはポーランドへ戻ることはできず、しかし引退するにも早すぎるという気持ちを抱きながら、生活していかなければならない。パレスチナ到着以降の回想の大部分を占めるのが生活費の節約の話題である。彼は「内職」として文章を書き始めるが、清書係がついているわけではなく、なかなか出版の見通しも立たない。新たにやってくる避難者から話を聞こうとするが、その多くは彼の招きに応じなかった。

アウシュヴィッツ (オシフィエンチム) についての第一報がパレスチナに達したのは一九四二年一月頃とされる (Hartglas 1996: 379-380, n. 63)。ハルトグラスの記憶では一九四四年に「死の収容所やガス室、ワルシャワ・ゲットや他の町からの大量輸送について、最初のしらせが届いた」という。二十数年前、反ユダヤ主義者からハルトグラスの友人へと態度を変えた農民党議員ミゼーラは捕えられ、息子と共にアウシュヴィッツで没した。ポーランド社

会との協力を信じ、ワルシャワに留まり貧困層支援と記録を続けた歴史家リングェルブルムは、ゲッター蜂起鎮圧後の瓦礫の上で処刑された。

目的地へたどりついたはずのシオニストが求めた共同体は、死線の向こうへ去っていた。ハルトグラスが失った「見えない糸」、彼が最後に「私の民族」と呼んだものは、ポーランド・ユダヤ人社会、それもおそらくは、ポーランド語の定期刊行物で結ばれたワルシャワ・ユダヤ人の知的コミュニティに他ならなかった。彼を認め、また彼が認めた読者層に「ポーランド国家のため、流血を辞さない貢献」を呼びかけたのは、ハルトグラス自身であった。判断は適切であったのか、ゲッターに彼らを残しパレスチナへ渡ったことは正当化されるのか。「自分の罪悪感や卑劣さとともに生きるのが重苦しい」(Hartglas 1996: 381)という晩年の独白に答えは示されていない。「灰色の時間に一人座っているのがすきだ」と詩に記した彼の、先の途切れた糸をつかむような望郷は、もはや目的地ではなくなったパレスチナから遠く、「中欧」に呑み込まれたディアスポラの地へと逆照射されたのである。

281-289)´ Hartglas (1996: 90-93)´ および Sohn (2009: 330-334) 参照。

- * 8 ドモフスキは宣言を独逸軍へのポーランド人兵士の人員補充を容易にするために出されたものとしている。また、戦況が悪化した場合にも独逸の構想に沿ったポーランド国家が既成事実として成立していることで、ロシア領ポーランドを事実上下ドイツ側に組み込むための布石であった、としている。
- * 9 対照的に、ユダヤ人弁護士に依頼することで判事の心象を害することを恐れ、ユダヤ人の顧客は彼を避けがちであった。

* 10 ハルトグラスには『ラスヴェト』に掲載された一連の記事やパンフレットなどロシア語の著作も多くあるが、それについて回想では特に触れていない。

* 11 二〇一二年八月にテルアビブにおいて四週間のフィールドワークを行った際、カリン・O・コッソイ氏 (Karin O. Kossov) の御助力により、ハルトグラスの孫にあたる故アロン・エシユバル氏 (Aron Eshpar) の夫人リファカ・エシユバル氏 (Rivka Eshpar)´ ハルトグラスのひ孫にあたるヨナタン・エシユバル氏 (Yonatan Eshpar) とイサマル・エシユバル氏 (Itamar Eshpar) より、イスラエルでのハルトグラスについてお話を伺うことができた。また、ハルトグラスの長男、故テオドア・ハルトグラス氏 (Theodore Hartglas) の自伝 (未刊行) や、引用した詩を含む晩年のメモ、書簡、写真を閲覧させていただいた。深く感謝する。なお本稿で扱った資料 (定期刊行物、パンフレット等) は、主にワルシャワ

●注

- * 1 Zyndul (2000): Mendelsohn (1981).
- * 2 グリウンバウムは第一次大戦後ポーランド・シオニズム運動の主導権を握った。一九三三年からパレスチナへ移り、ユダヤ機関移民代表となり、第二次大戦中は占領下のヨーロッパ諸国に残るユダヤ人を救出する活動にあたった。一九四八年五月一日、イスラエル独立宣言に署名した一人。Mendelsohn (1981: 74): Czajka (2010: 99-100).
- * 3 例えは一九三〇年代にワルシャワで発行されていた『ツォフィム』紙は、一度ならず一面全体を使いハルトグラスの論説を掲載している。また同紙は「ハルトグラスがクラクフへ」と題し講演会の宣伝記事を打った。Hartglas (1938a: 1-2): Hartglas (1938b: 1).
- * 4 Letocha, Cata. and Glowicka (eds.) (1999): Cata (2005).
- * 5 Kopówka (2001: 15) はシエドルツェを例に挙げ、ポーランド独立運動に対する「リトヴァーク」と、もともと居住していたユダヤ人との態度の違いを指摘する。
- * 6 一九〇三〜〇六年にかけて、ロシア帝国では大規模なボグロムが南部を中心に発生し、ポーランドにまで波及した。ハルトグラスが目撃したのはその一部であった。背景には、一九〇〇年以降の経済の停滞、一九〇二〜〇三年にかけての不作、日露戦争の混乱や一九〇五年革命に対する右翼の反動が挙げられている。衝撃は大きく、ロシア・ユダヤ人の転機になったといわれる。鶴見 (二〇一二: 一〇八〜一〇九) 参照。
- * 7 ビャーウイストクのボグロムについて Hartglas (1906a:

のユダヤ歴史研究所 (ZH)´ ワルシャワ大学図書館、国立図書館、ポーランド科学アカデミー図書館で閲覧し、一部をエルサレムのイスラエル国立図書館において閲覧した。ポーランド史全般については、北海道大学附属図書館とスラブ・ユーラシア研究センター図書室所蔵の文献を参照した。

●参考文献

- 鶴見太郎 (二〇一二) 『ロシア・シオニズムの想像力——ユダヤ人・帝国・パレスチナ』東京大学出版会。
- デイヴィス、ノーマン (二〇一三) 『ワルシャワ蜂起 一九四四——英雄の戦い(上)』染谷徹訳、白水社。
- ハウマン、ハイコ (一九九九) 『東方ユダヤ人の歴史』平田達治・荒島浩雅訳、鳥影社 (Haumann, Heiko, Cezary Jenne (trans. from German) (2000) *Historia Żydów w Europie Środkowej i Wschodniej*, Warszawa: Adamantan).
- 宮崎悠 (二〇一三) 『A・ハルトグラス』領土と民族』より——ポーランド・シオニズムの一事例』『境界研究』二号、一八一—一九八頁。
- 森まり子 (二〇一三) 『社会主義シオニズムとアラブ問題——ベングリオン軌跡 一九〇五—一九三九』岩波書店。
- 森まり子 (二〇〇八) 『シオニズムとアラブ——ジャボティンスキーとイスラエル右派 一八八〇—二〇〇五年』講談社。
- 安井教浩 (二〇一三) 『一九二五年の『ウゴタ (合意)』——ポーランド政府の論理とユダヤ議員団の論理』『現代史研究』四七号、四七一—六五頁。

安井教浩 (二〇〇三)「ポーランドの政治言語における『ユダヤ人』——一九二二年の大統領暗殺前後の場合」『神話・象徴・文学』三号、二八三—三三三頁。

安井教浩 (二〇〇七)「第二共和政ポーランドにおける議会政治の幕開けと民族的少数派——東カリシニア・ユダヤ人の選択 (一)」「長野県短期大学紀要』六二号、一三七—一五一頁。

安井教浩 (二〇〇九)「第二共和政ポーランドにおける議会政治の幕開けと民族的少数派——東カリシニア・ユダヤ人の選択 (一)」「長野県短期大学紀要』六四号、一三七—一五四頁。

Bartal Israel (2005) *The Jews of Eastern Europe, 1772-1881*. Chaya Naor (trans.), Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Buthak, Władysław (2000) *Dniowski-Rosja a kwestia polska: u źródeł orientacji rosyjskiej obozu narodowego 1886-1908*. Warszawa: Neriton.

Cata, Alina and Gabriela Zalewska (2000) "Litwacy," in: Alina Cata (ed.), *Historia i kultura Żydów polskich: słownik*. Warszawa: Wydawnictwa Szkolne i Pedagogiczne, p.190.

Cata, Alina (2005) *Żydowskie periodyki i druki okazjonalne w języku polskim: bibliografia*. Warszawa: Biblioteka Narodowa

Czajka, Michał (2010) "Grünbaum Iechak," in: Marzena Wieczorek, Magdalena Prokopowicz and Witold Sienkiewicz (eds.), *Żydzi Polscy: historie niezwykłe*. Warszawa: Demart, pp.99-100.

Dniowski, Roman (1883) *Nasz Patrijotyzm: podstawy programu*

Hartglas, Apolinary (1996) Jolanta Żyndul (ed.), *Na pograniczu dwóch światów*. Warszawa: Rytm.

Kassow, Samuel D. (2007) *Who Will Write Our History?: Emanuel Ringelblum, the Warsaw Ghetto, and the Oyneg Shabes Archive*. Bloomington: Indiana University Press.

Kopówka, Edward (2001) *Żydzi Siedlecy*. Siedlce: Edward Kopówka.

Łętocha, Barbara, Alina Cata and Zofia Glowicka (eds.) (1999) *Dokumenty życia społecznego Żydów polskich (1918-1939) w zbiorach Biblioteki Narodowej*. Warszawa: Biblioteka Narodowa.

Mendelsohn, Ezra (1981) *Zionism in Poland: The Formative Years, 1915-1926*. New Haven: Yale University Press.

Pearlman, Moshe and David Ben-Gurion (1970) *Ben Gurion Looks Back in talks with Moshe Pearlman*. New York: Schocken Books.

P. (Popowski), Deronni (2009) "Siedle—syjonistyczne miasto," in: Monika Adamczyk-Garbowska, Adam Kopciowski and Andrzej Trzciniński (eds.), *Księgi pamięci gmin żydowskich: tam był kiedyś mój dom....*. Lublin: Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej, p.110.

Rubin, Arnon (2007) *The Rise and Fall of Jewish Communities in Poland and their Relics Today: District Lublin*, vol. 2. Tel Aviv: Tel Aviv University Press.

Sobczak, Mieczysław (2007) *Narodowa Demokracja wobec*

współczesnej polityki narodowej, s.l., s.n.

Engelking, Barbara and Jacek Leociak (2001) *Getto Warszawskie: przewodnik po nieistniejącym mieście*. Warszawa: IFS PAN.

Fijałkowski, Paweł (2010) "Hartglas Maksymilian Apolinary," in: Marzena Wieczorek, Magdalena Prokopowicz and Witold Sienkiewicz (eds.), *Żydzi Polscy: historie niezwykłe*. Warszawa: DEMART, pp.111-112.

Hartglas, Apolinary (1906a) "Pogrom w Białymstoku." *Głos Żydowski* 22 (June 22) : pp.281-289.

Hartglas, Apolinary (1906b) *Terytorjum a Narod*. Warszawa: Tyg. Głos Żydowski.

Hartglas, Apolinary (1912) *Terytorjum a Narod*, wyd. 2. Lwów-Warszawa: Moriah.

Hartglas, Apolinary (1934) "BOJKOT." *Nasza Obrona: pismo poświęcone antyhitlerowskiej akcji gospodarczej* 2, p.2.

Hartglas, Apolinary (1938a) "Wielbiciele czynników zewnętrznych." *Cofn* 3 (7) : pp.1-2.

Hartglas, Apolinary (1938b) "Na marginesie poczytań unifikacyjnych." *Cofn* 4 (8) : p.1.

Hartglas, Apolinary (1939) "Caly naród żydowski—z Polską!" *Nowy Dziennik* (September 1) : p.3.

Hartglas, Apolinary (1944) *Poznaj ten kraj: do żołnierza polskiego*. Jerzolim: Komisja dla Spraw Żydów z Polski przy Agencji Żydowskiej w Palestynie.

kwestii żydowskiej na ziemiach polskich przed I wojną światową. Wrocław: Wydawnictwo Akademii Ekonomicznej im. Oskara Łangego we Wrocławiu.

Sohn, Dawid (2009) "Wielki pogrom w Białymstoku." Monika Zabłocka (trans.), in: Monika Adamczyk-Garbowska, Adam Kopciowski and Andrzej Trzciniński (eds.), *Księgi pamięci gmin żydowskich: tam był kiedyś mój dom....*. Lublin, Wydawnictwo Uniwersytetu Marii Curie-Skłodowskiej, pp.330-334.

Żyndul, Jolanta (2000) *Państwo w państwie: autonomia narodowo-kulturalna w Europie Środkowowschodniej w XX wieku*. Warszawa: DiG.

Żyndul, Jolanta (2002) "The Legal Practice of Apolinary Hartglas." *Justice* 30, pp.45-47.

●著者紹介●

- ①氏名……宮崎悠(みやざき・はるか)。
- ②所属・職名……北海道教育大学教育学部国際地域学科・講師。
- ③生年・出身地……一九七八年、北海道小樽市。
- ④専門分野・地域……政治学、国際政治。
- ⑤学歴……北海道大学法学部、北海道大学大学院法学研究科修士課程、同博士課程、同博士(法学)。
- ⑥職歴……北海道大学大学院法学研究科助教、日本学術振興会特別研究員PD(同大スラブ研究センター)、成蹊大学法学部助教を経て、二〇一四年四月より現職。
- ⑦現地滞在経歴……ポーランド(一九九九年～二〇〇〇年、私費による在外研究)、ドイツ(二〇〇八年、国際ロータリー財団奨学生)、イスラエル(二〇一〇年・一二年、特別研究員奨励費による在外研究)。
- ⑧研究方法……史料、文献調査。
- ⑨所属学会……比較政治学会、東欧史研究会、日本ユダヤ学会、日本国際政治学会。
- ⑩研究上の画期……一九八九年にベルリンの壁が崩壊し、一九九一年には地図上からソ連が消滅したことに衝撃を受けた。大学では第三外国語でポーランド語を学ぶことができ、この地域への関心を深めるきっかけになった。
- ⑪推薦図書……エマニユエル・リンゲルブルム『ワルシャワ・ゲットー——捕囚一九四〇～四二のノート』(大島かおり訳、みすず書房、二〇〇六年)。フェリクス・ティフ編著『ポーランドのユダヤ人——歴史・文化・ホロコースト』(阪東宏訳、みすず書房、二〇〇六年)。アイザック・バシエヴィス・シンガー『不浄の血』(西成彦ほか訳、河出書房新社、二〇一三年)。ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』(工藤正廣訳、未知谷、二〇一三年)。